



一般社団法人国際音楽祭ヤング・プラハ

会長 岩崎 淑

第 25 回国際音楽祭ヤング・プラハが成功裏に終わりましたことを喜びと共にご報告いたします。創立 25 周年の節目となる今年は、会期を 8 月 28 日から 1 カ月間とし、プラハとチェコ各地で計 17 回のコンサートを開きました。7 か国から 19 名のソリスト、そしてヴァイオリン・デュオ、ジャズ・トリオ、弦楽四重奏、吹奏楽アンサンブル、合唱団、弦楽奏団、オーケストラが参加しました。また過去のヤング・プラハに出演し、今では若手演奏家として活躍中の OB にも参加していただき、25 周年に相応しい規模と内容の音楽祭となりました。

日本からは品川ジュニア弦楽奏団、ヴァイオリンの大江肇さん、山根一仁さん、指揮の太田弦さん、チェコ在住の Eduard Kollert (ヴァイオリン)さん、スイス在住の伊藤悠美 (ヴォーカル) さん、そして台湾からはローゼ・シェン (ヴァイオリン) さん。OB として活躍中のピアノの阪田知樹さん、チェコの宮田大さんが出演されました。

現地からの報告では素晴らしい演奏ばかりで 25 周年記念に相応しい音楽祭を演奏者、聴衆、支援者、関係者全員で祝うことが出来ました。この音楽祭の意義に賛同し支援してこられました皆様には心から御礼申し上げます。

次は 30 周年そして 40 周年と次の世代にバトンを渡し、この音楽祭を継続し発展させてゆかなければなりません。皆様の変なご支援をよろしくお願いします。

個々の演奏については、ヤング・プラハの力強いサポーター、島津俊子様が素晴らしい感想を書いてくださいましたので、掲載させていただきます。

今年は国際音楽祭ヤング・プラハ 25 周年の記念すべき年でしたが、予期されなかった劇的な環境の中で幕を開けました。オープニングコンサートの直前、名誉会員のヴィエラ・チャースラフスカさんがご逝去されたのです。このコンサートをとても楽しみにされていて、数日前には、ヤング・プラハの実行委員にチケットの追加まで依頼されていたほどです。

プラハのドヴォジャークホールにて品川ジュニアストリングオーケストラでスタートした国際音楽祭ヤング・プラハは、チェコと日本との友情を象徴した形になりました。

東京オリンピックがきっかけで親日家となられた彼女と、日本から来た若いオーケストラのプラハでの出会い。そのうえ、プログラムには、若いころピアノにも専念され、音楽好きだったチャースラフスカさんが大好きだったチャイコフスキーのセレナードも含まれていました。このオーケストラの演奏はプラハの音楽界でも高い評価を受け、ことに児童も含む若いアンサンブルの繊やかな感性には驚かされました。白いユリに姿を変えて聴かれていたチャースラフスカさんもご満足されたはずですよ。



名誉会員 故チャースラフスカ様に捧ぐ

今年の本祭のプログラムは、25 周年をお祝いするにふさわしくとても充実したものでした。

悲報で始まった本祭ですが、とてつもない快報もありました。プラハのポーランド大使館サロンでの演奏が予定されていたピアニストの阪田知樹さんが、プラハ入りの前に、難関のリスト国際音楽コンクールに優勝されたのです。阪田さんはヤングプラハファンの間ではもちろんのこと、プラハでもサンサーンスのピアノ協奏曲などを披露し、喝采を浴びた人気のピアニストです。

ポーランド大使館は、旧宮殿で、サロンもまるでショパンの時代に戻ったような華やかな雰囲気がありました。そんな環境の中で始まったショパンのバラード第一番。そのあとに演奏されたリストのポロネーズでも言えますが、阪田さんにはどんな難曲に取り組んでいても技術的な余裕があり、聴く側は音楽そのものに陶醉してしまいます。若いにもかかわらず、研鑽を積んで綿密に磨かれた的確なテクニックがベースになっているからこそ、音楽の表現も自由自在です。



ポーランド大使館にて 阪田さんの演奏

ショパンは祖国ポーランドの詩人ミツケビッチの愛国的な詩に啓発されてこのバラードを書いたと伝えられています。阪田さんのバラードではメロディーの流れが失われることのないフレージングでありながら心地よい起伏が感じられ、文字通りピアノの詩人になってショパンを語っているように思いました。阪田さんの音のカラーに対するセンスの良さ、それを実現できるテクニックにあらためて感服しました。

引き続いて耳に響いてきたのは、リストのポロネーズです。ポロネーズはもともとポーランド宮廷の行進曲から発展したものです。ハンガリー生まれのリストがポロネーズを作曲したのは、ショパンの死を偲んでのこととされています。曲のあちこちにショパンへの慕情が感じられ、阪田さんは、繊細な美しいタッチで詩の世界に導いてくれました。一時、リストの作品ということのを忘れてしまうほど軽やかな流れに心を奪われました。当時、指が 6 本あるのではないかと、思われていたリストが書いたのですから、超絶技巧と言われるレベルも半端ではありません。弾く側も聴く側も心構えのいる曲でしょう。にもかかわらず、阪田さんの手にかかると、超絶技巧もなんのその。綿密に仕上げられながらも、軽やかで、ピアノの魔術にかかってしまった錯覚を起こしてしまいます。熟練した錬金術師による美しい宝石を次から次へと見せられているような気分でした。



ポーランド大使より花束贈呈

バランスのとれた美しい音に感銘を受けました。リストが生きていたら、阪田さんからまたあらたなインスピレーションをもらうのではないかと、思ったほどです。ポーランド大使館の一般には珍しいベーゼンドルファーのピアノで、阪田さんはペダリングも駆使し、このタペだけの、と思われるユニークなリストが聴けました。リスト国際音楽コンクール優勝直後の脂の乗り切った最高のリストに触れることのできた私たちはなんと幸運だったことでしょう。

今年の記念すべきヤング・ブラハの本祭は、ほかのコンサートも充実したもので、一度のコンサート通いも欠かさなかった熱心な皆勤者もいました。

オープニングコンサートの一週間後に、ワルトシュタイン宮殿(現上院議会の拠点)大広間で演奏された大江馨さんのヴァイオリンは忘れることはできません。



ワルトシュタイン宮殿にて 大江さんの演奏

プログラムは、J.S.バッハのシャコンヌ(無伴奏パルティータ第二番より)から始まりましたが、筆者がイメージしていた厳しい重音奏法によるオルガンの響きのような厚い和音で始まるのではなく、もともとは 3 拍子の舞曲であるフランス地方のシャコンヌのような軽やかさで始まったのには、はっと息をのみました。

なかなか珍しいインタープリテーションではないでしょうか。バロック奏法とも違うように感じました。このタペのようにフランス風舞曲を感じさせられるシャコンヌに接したのは初めてです。なかなか面白く新鮮でした。この演奏を聴いて、バッハはこうでなくては、ああでなくてはという姿勢では、却ってバッハの面白さを楽しめないと思ったものです。

次は打って変わって、カミーユ・サン＝サーンスの序奏とロンドカブリッチオーソ。この曲は初めから最後まで大江さんの素晴らしい技術で支えられた軽やかさとウィットに富んだリズムを存分に楽しませていただきました。でも、そんな素敵な演奏になったのも共演されたチェコのピアニストのミロスラフ・セケラさんのピアノが大江さんのヴァイオリンに乗って踊っていたからでした。これこそ音楽の醍醐味というものなのでしょう。

チャースラフスカーさんに捧げられたオープニングコンサートで始まった本祭。

ファイナルコンサートは、若冠 22 歳でありながら堂々と PKF プラハ・フィルハルモニアを率いた大田弦さんの指揮、若くしてすでに巨匠の道を歩む宮田大さんのチェロでドヴォルザークのチェロ協奏曲短調でクライマックスを迎えました。この曲は、楽器のジャンルを超え、協奏曲の最高傑作のひとつでしょう。ドヴォルザークがアメリカ時代に終止符を打ち、チェコに帰る決心をした 1894 年から 1895 年にかけて書かれた作品ですが、この曲の中では、故郷を思うボヘミア音楽とアメリカ黒人霊歌やインディアンの音楽が見事に調和しています。

このドヴォルザークの作品をプラハのドヴォルザークホールで、しかもこの日は、作曲家アントニン・ドヴォルザークの直系のお孫さん、同名のアントニン・ドヴォルザーク三世氏も応援に駆けつけられ、25 周年記念に相応しいチェコならではの最高の雰囲気演奏されました。



ドヴォルザークホールにて 太田さんの指揮

宮田さんの演奏は、圧巻、の一言。宮田さんのチェロの音色は、彼だけの持つ何百もの繊細な色合いを巧みに操り、『ドヴォルザーク語』で語っているように思われました。

プラハのドヴォルザークホールで、プラハのオーケストラで、それらに少しも違和感がありません。

それどころか宮田さんのチェロにオーケストラが吸い付くような面持ちで同じように呼吸をしながら、演奏していたと思われました。

宮田さんはこの場所で格別なインスピレーションを得られていたのではないのでしょうか。日本人のチェリストがドヴォルザークでチェコ人奏者を感化する、とは面白い現象です。後日、オーケストラメンバーの一人も同じようなことを語っていました。

この曲を愛する誰しもは、おそらく 2 楽章を無視することはできないでしょう。独奏チェロがほろ悲しい主題を歌いあげます。宮田さんのチェロからはドヴォルザークの静かな胸騒ぎが感じられました。



ドヴォルザークホールにて 宮田さんの演奏

独奏のメロディーに、ドヴォルザークは、自身の歌曲を引用しています。この曲は、作曲者が若き日、密かに想いを寄せていたヨセフィーナ（自分の妻の姉）がとても好きだった曲ですが、取り入れたのには理由があります。ニューヨークで作曲中に、彼女が重病という知らせを聞いたのです。このメロディーにドヴォルザークは、思い切りの感謝の気持ちと回想を託したのでしょうか。宮田さんのチェロはそれを思って、震えているようでした。背中がぞくぞくしました。

近くに座られていたお孫さんのドヴォルザーク氏をちらっと見ますと、大きな胸がびくびく動いていました。作曲家ドヴォルザークの思いが、宮田さんのチェロに、そしてそのチェロからお孫さんに伝わったと思わざるを得ませんでした。ドヴォルザークをはじめ、チェコの音楽は土の匂いがする、と言われますが、この夕べは、まさにアメリカに住む作曲者が祖国の香りを音楽で表現したと思わずにはいられませんでした。

ドヴォルザークの音楽を日本人の宮田さんがあれほどまでに劇的に再現されたのは、奇跡というのか、天才的、というほかありません。



ファイナルコンサート ドヴォルザーク 3 世氏

この日のコンサートの冒頭に台湾出身の若き女性ヴァイオリニスト、Rose Hsien さんがエルンスト・ショーソンの詩曲(ポエム)を演奏されたことも特記しておきたいと思います。文字通り、この曲は、ヴァイオリンがまるで子供や愛人にそっとうと耳元で語りかけているようなとてもメランコリックで優しいメロディーのソロで始まります。基本的には長調の曲にもかかわらず、臨時記号をつけてヴァイオリンなどの弦楽器では比較的弾きにくいフラットを網羅して短調にし、作曲家ショーソンは、自分の思うポエムにふさわしい錆がかった響きを出したかったのではないかとと思われるほどににくいほど洒落た工夫をしています。



ファイナルコンサート Rose Hsien さん

Rose さんは、幼少時代はシンガポールでヴァイオリンの研鑽をされた才能あるアジアの乙女ですが、若くして欧州の空気になじまれたおかげでしょう。この曲から期待される哀れみの中にも軽やかなフランス風のエスプリがあちこちに感じられました。本物のヨーロッパの空気に触れずして、手先の技術だけでは、ポエムの味は出せないでしょう。

これは、重厚な甘い音を出す楽器ではなかなか表現できない曲だと思いますが、Rose さんの華奢な体から湧き出る情熱は品がよく、最後は、徐々にもととの長調に戻って今までのつづやきで葛藤していた心がやっとのことで限りない空間に到達。ついに開放感を得、のびのびとした自由な世界に舞い上がって終わる、という物語が絵に描かれたように感じられました。内容的には大変難しい曲でありに、下手をすると聴衆を退屈させる危険性もある曲にもかかわらず、ヴァイオリンの響きをはじめからおおっ広げにせずに最後まで柔らかい色合いを堪能させてくれた奏者に大きな拍手を送りました。

島津俊子 記



第 25 回 国際音楽祭ヤング・プラハ

今年は、8月28日から9月28日にわたって、プラハとチェコ各都市等で演奏会が開催されました



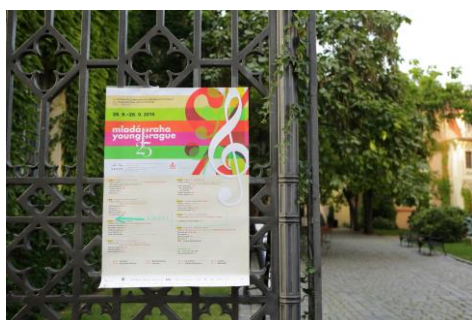
Ledebur 庭園
Collegium Instrumentale



弦楽四重奏 ルチャニーにて



ヤング・プラハ創設者
R.Bachinger さん



第 25 回ヤング・プラハ ポスター



ベツレヘム礼拝堂 山根さんの演奏

この度は伝統ある国際音楽祭ヤング・プラハに参加させて頂き、本当にありがとうございました。

ルドルフィヌムのドヴォジャークホールでのファイナルコンサートで、3人の才能豊かなソリストの皆様と共演させて頂きました。

今回光栄にもドヴォジャークホールでは、ドヴォジャーク本人をはじめ、クーベリックやノイマンなど憧れの大指揮者達が使っていたであろう楽屋を使わせて頂くことが出来、その長い歴史の蓄積を感じさせる空間にただただ圧倒されました。

また、本番直前に楽屋の窓から目にした、モルダウと夕日とプラハ城の織り成す夢のように美しい景色がとても印象的でした。

もちろんホールそのものも大変素晴らしく、僕のような若い指揮者に対して驚くほど協力的かつ積極的な演奏をして下さったプラハフィルハーモニア管弦楽団の皆様への作り出した響きが今でもまだ耳に残っています。

そしてコンサートの翌日にはドヴォジャーク3世に直々にご案内して頂き、今まで伝記で読んだことのあるだけだったドヴォジャークのヴィソカーの別荘を訪れるという貴重な機会を得ました。

現実味が無いまでに美しい田園風景の中にあったその別荘には、彼の使っていた楽譜や家具がそのまま残されており、その雰囲気からは何かドヴォジャークの音楽の源泉のようなものを感じ取ることが出来たように思います。他にも隙間隙間の時間に訪れたヴィシェフラドのスメタナとドヴォジャークのお墓やドヴォジャーク博物館など、1週間の滞在期間中に出来た思い出は数え切れません。

初めての海外での演奏会がこのような忘れ難い経験となったのは、日本・チェコの両委員会の皆様と、様々な面でご協力して下さいました全ての皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

今回も記念すべき25周年でしたが、またこの先の25年間、さらにその先もこの素晴らしい音楽祭がますます発展していくことを心からお祈り致します。



太田 弦 コンダクター

プラハと言えば、ドヴォジャークやスメタナ等偉大な作曲家の出身地であると共に、モーツァルトを始め数々の有名な作曲家が好んで訪れた大変美しい街であり、ヨーロッパにいるうちに一度は足を運んでみたいと常々思っていました。そんな憧れの街プラハに今回、国際音楽祭ヤング・プラハでの演奏という素晴らしい機会を頂き訪れることができ、とても嬉しく、また光栄でした。

初めてのプラハ訪問は、私にとって思い出に残る3日間となりました。



私はワルトシュタイン宮殿で演奏させて頂いたのですが、この宮殿はプラハで最も大きな宮殿の1つであり、その歴史ある建物に足を踏み入れるだけで、作曲家達が活躍した当時の想像を掻き立てられ、私の演奏にもなにか特別な力を与えてくれたような気がしました。同じコンサートに出演した同世代の音楽家達と知り合うことが出来たのも良い思い出です。

リハーサルやコンサートの合間の時間には、プラハの街を歩き周ることも出来ました。天気にも恵まれ、その中世ヨーロッパの雰囲気が残る街並みは、息を呑むような景色で、中世にタイムスリップしたかのような感覚を味わうことができました。美味しい食事やビールも満喫し、また訪れたい都市の1つとなりました。

今回このような機会を下さった音楽祭の方々やコンサートをお聴き下さった方々への感謝の気持ちと共に、この素晴らしい経験を活かしてこれからの音楽活動に励んで参りたいと思います。

大江 馨 ヴァイオリニスト

ブラハでの時間はとても素晴らしいものでした。僕にとって初めてのチェコ。それも、演奏しに訪れることができたということは、本当に嬉しいことでした。まず始めに、この素晴らしい機会を与えてくださった全ての方に感謝申し上げます。

僕が演奏したのは Mozart の 5 番の concerto。邦題では「トルコ風」と題されているこの曲。その名の通り、フィナーレには異国の香りも漂う、僕の大好きな作品です。Mozart のオーケストラとヴァイオリンのための作品という、とても自由のきく、可能性のあるものだという印象を持っています。オーケストラは小さくコンパクトな編成が望ましいし、ソロもシンプルに音楽を紡ぎ出しやすい。もちろんそこに難しさが存在するわけですが、そこがモーツァルトの音楽の美しさだと思います。

本番当日、ゲネプロでオーケストラの皆さん、そして指揮者の方と初対面の時間。何しろ開演 2 時間前。テンポ、音楽の表情、そしてボーイングなど、細かな部分にわたるまで出来る限り共有しました。

演奏会場となったバツレヘム教会は、神聖な空気に包まれた美しいところでした。この日は僕を含めて 3 人のソリストによるコンサート。ファゴット、オーボエ、そしてヴァイオリン。それぞれ異なる性格を持った楽器によるコンチェルト達。聴衆として聴きたいなあとか考えながら、楽屋で差し入れのおにぎりを食べていました。美味しいおにぎりをありがとうございました。

本番はあっという間にやってきます。心の中で「楽しんで」と自分に一言。とても良い集中力と緊張感のなか、ステージへと歩き始めたところまでは覚えてます。

オケの皆さん、そして何よりもお客さんが喜んでくれてよかったです。

翌日からは初めてのブラハを楽しみました。ベートーベンが歩いたかもしれない石畳を歩きながら、古い街並みを味わい、また、セグウェイにも乗って、3 時間たっぷり観光しながら旧跡地をめぐりました。

4 日間ほど滞在させていただきましたが、とても充実した、本当に素晴らしい日々を過ごすことができました。この美しい街に、また演奏で訪れることができるよう、これからも音楽を続けていきたいなと思いました。

お世話になった全ての方々に感謝を込めて。
ありがとうございました。



山根一仁 ヴァイオリニスト

今回は二度目のブラハでしたが、また風景が違って見えました。やはり、歳を重ねると見え方や感じ方が変わるなと思う日々でした。

ドヴォジャークホールで弾かせていただけるのも二回目で、前とは違った空気の流れを感じながら演奏しました。前回の演奏の時は、ブラハの空気と、チェコ人の素晴らしいオーケストラに包まれて、優しさのあふれるホームステイで心温まり、色々なことを吸収して帰りたいという思いがありましたが、今回は何かを吸収したいという気持ちより、



今まで私が経験して積み重ねてきた音楽をドヴォジャークのチェロ協奏曲に重ね合わせながら、ドヴォジャークの気持ちを感じ取り演奏しました。

この地にドヴォジャークは帰ってきたかったのだなあとと思うと、二楽章と、三楽章の一番最後の辺りは、演奏しながら涙が溢れてきました。

しかし、ドヴォジャークは違う地で、望郷の思いで頑張っていたのだと思うと、その姿を思い浮かべた瞬間、三楽章の終わり辺りの演奏では、寂しさで胸から溢れ出す感情と涙を、希望と光の力で寂しさを大きく包み込み、不安や色々な寂しさの気持ちが天に昇っていく感覚を感じながら演奏しました。

また新たなドヴォジャークのチェロ協奏曲の姿を、演奏しながら発見、生まれることができました。日本の皆さんにもこの気持ちを音に表しお届けしたいと思いました。

ブラハ滞在二回を通して、私に大切なものを与えてくださったヤング・ブラハの皆様、ブラハに住む日本人とチェコ人の皆様、ドヴォジャークのお孫さんにあたるドヴォジャークさん、本当に有り難う御座いました。

宮田 大 チェリスト

国際音楽祭ヤング・ブラハ、25 周年おめでとうございます。
この記念すべき年に OB としてお招き頂きまして、大変光栄です。

初出演の第 22 回では、ソロリサイタルに加えてチェロとの室内楽、そしてドヴォジャークホールでのファイナルコンサートにて指揮者:アンドレイ、そして、オーケストラの皆さんとの共演という 3 つの演奏形態で初めてヤング・ブラハの皆様と時間を共有させて頂き、日本とチェコ、そして世界中の音楽家の皆さんとの刺激的なコラボレーションの機会にとっても感激しました。そして、25 周年である本年も、また忘れられない一時となりました。

3 年前にはまだ日本で勉強していたのですが、今はドイツで学ぶようになり、今回はドイツからハンガリー経由でブラハ入りしました。空港で出迎えて下さったのは、3 年前と同じくフィンダ御夫妻でした。まるで、すーっと 3 年前にタイムスリップしたように感じ「ああ戻ってきたんだ。」何故かふと家に戻ったような、そんな気がしたのです。

翌朝から会場のポーランド大使館ヘリハーサルに出かけました。ホテルから会場までの素晴らしい景色は懐かしさも相まって尚一層深く心に響き、その美しさはこの上ありませんでした。小道を抜けると素晴らしい大使館の歴史的な内装に圧倒され、一瞬にして遥か昔に舞い降りたかのような雰囲気包まれました。

ピアノはポーランド大使館にちなんで、ベーゼンドルファーのショパンモデル。初めて出会うピアノでした。ハンガリーから来てリストを、チェコの中のポーランドでショパンを弾かせて頂きました。

お客様の心からの拍手、演奏後に頂く嬉しいお言葉の数々、ブラハのお客様が我々演奏者を温かく迎え入れて下さるのは、偏にヤングブラハスタッフの皆さまのおかげです。

会場にいる全ての方からなんとも言えない温かさが伝わって、一つの輪になる、そんなヤング・ブラハが私は大好きです。素晴らしい時を再び、ありがとうございました。



阪田知樹 ピアニスト

チェコへの 40 人の親善大使

世界中の子供たちが自由自在に自分の国の言葉話している！！そのことに驚きをもって気づいた故鈴木鎮一の始めた「スズキメソード」、言葉を覚えるように子供は育て方ひとつで高い能力を身につける事が出来る。それを音楽で実証したのがスズキメソードです。そこで学ぶ品川ジュニアストリングオーケストラ「品弦」の 40 人の子供達を引き連れて 8 月 26 日、国際音楽祭ヤング・ブラハへ参加のため成田空港を離陸しました。

これまで品弦はオランダ、ドイツ、オーストリアと 5 回の海外コンサートツアーを行っています。今回ヤング・ブラハ実行委員会のフィンダ志保子氏に、是非一度チェコでのコンサートをとご相談したところ、なんと 25 周年の記念のヤング・ブラハ音楽祭に参加して下さいとのありがたいお申し出を頂きました。

28 日にスメタナの生地であるリトミシュル「スメタナ劇場」で最初のコンサートを行いました。地元の「K O S」合唱団と指揮の M o t l 氏のパワーに圧倒されながらも負けじと頑張って演奏の子供たちにまず感動でした。子供たちも合唱団とのジョイントで、本場ヨーロッパの演奏を肌で感じ取ったようでした。

そして 13 歳ながら数々のコンクールで受賞している Eduard Kollert 君とは、あっという間に皆仲良くなりヴィヴァルディの四季を共演、音楽での国境を越えた交流が出来ました。翌日、ヘジマヌーラー・ムニェステツ教会でのとても暖かい雰囲気でのチャリティコンサートを経てブラハに入りました。ヤング・ブラハの特別のアレンジで訪れたヴィソカ村のルサルカ荘でドヴォジャークのお孫さん他、子孫の方とお会いできたことは、今回の旅行の一番のお土産でした。84 歳の 3 世が我々のために手作りで焼いてくれたジンジャーケーキ、そのお礼に皆で合奏した「ユーモレスク」。その演奏に涙し聴いて下さった 3 世を見て私も目頭が熱くなりました。



9月1日、ドヴォジャークホールでのコンサートは私にとっても子供たちにとっても一生の思い出になる感慨深いものでした。コンサートの直前に急逝されたチェコの国民的英雄チャスラフスカさんへの追悼を含め、コンサートが始まりました。



今や世界的チェリストのヤムニーク氏とのチェロドッペル協奏曲の共演は本当に世界のトッププロと一緒に演奏することによって指導よりも子供たちには勉強になったことと確信しています。たくさんのチェコの暖かい方々のサポートのお陰で40人の子供親善大使のコンサートツアーは無事終える事が出来ました。ありがとうございました。後日、音楽雑誌オペラ・プラスに「品川ジュニアストリングオーケストラは今後ジュニアを取った方が良い。それほど素晴らしく、とても子供の演奏とは思えなかった！！」との投稿があったことを聞きました。本当に素敵な9日間のコンサートツアーでした。

品川ジュニアストリングオーケストラ

団長・指揮者 印田礼二

《 ドヴォジャーク3世氏より 》

Je jisk' fofesnípici, že člověk i ve zralém věku může prožít chvilu štěstí, radosti a pohody.
Doufám, že mi nebude nic do zlosti, že jsem předtím loncem měsíce září 2016 prožil tři dny plné deště, radosti a štěstí.
Dopomohla k tomu krásnému počasí i „nebeská“ hudba z pera dědovského přítele Petre Iljiče Čajkovského a i mého dědovského smotníka.
A nejen to – poznal jsem opětovně se mezi mládeží krásné hudby neexistující jazykové bariéry a hudba sama vytvořila a upevňuje přátelské vztahy.

Díky ze to, ze hudba i přátelství

ve Vysočce
29.9. 2015

Ant. Dvořák

私のように高齢になっているにも関わらず、幸せで喜びを感じリラックスできる体験ができたことはこの上なく嬉しいことです。このような想いができる時間を持った私のことを誰も嫉妬しないことを願います。

この2日間は素晴らしい印象と喜びと幸せで溢れていました。その至福の時間を天からきた私の祖父の音楽と祖父の友人であったチャイコフスキーの音楽とで喜びを何倍にもしてくれただけではなく、その体験を通して音楽と人との間には障害がないことを感じました。

音楽を愛することだけでそこに自然な友情が生まれることもあらためて感じました。音楽と友情に感謝します。



アントニン ドヴォジャーク

2016年9月29日

ヴィソカーにて

事務局からのお知らせ

国際音楽祭ヤング・プラハもとうとう25周年を迎えることが出来ました。デビューの頃にヤング・プラハに出演された多くの若手音楽家が今では世界で活躍されています。このユニークな音楽祭は日本とチェコを繋ぐ代表的な文化交流活動ともなりました。これも皆様のご支援の賜物と心から感謝いたします。この活動を継続し、発展させてゆくためにより多くのご支援を必要としております。会員組織ヤング・プラハ フレンズにご加入戴きたくお願い申し上げます。

入会にはヤング・プラハのホームページをご利用下さい。

<http://www.youngpraha.jp/membership/>